

は政治の中心として又天平の文化を建設せる時代である、從つて此の時代の記述が、僅々七十餘年に拘らず約百餘頁を費して居り然も其の記述は天平の佛教藝術を主として、其の現存せる遺物遺蹟より記述されて居る事は蓋し當然の事であらう。第十韋山背食郡以下第十三章僧兵の發生迄は古都として、東大寺、興福寺と朝廷並に藤原氏との關係より、兩寺の經濟的發展並に武力たる僧兵の事が説かれて居り、第十四章平氏の南都焼討以下第十九章南都佛教の革新迄は中世の新興勢力たる武家に寺院の勢力たる僧兵の屈服して行く過程であり、佛教史上に於ては平氏の南都焼討、源賴朝の復興があり、當市佛教美術の第二の興隆期でもあつた。第二十章鎌倉時代の商工業以下第二十六章筒井順慶迄は、中世末期の紛亂より終に豪族の手より豪族の手に其の實力の移る過程を示し、又近世都市への發展形態としての商工業の組織即ち座の發生發達、庶民の活躍等が記述されて居る。第二十章「聖臣氏の時代」を経て、第二十八章徳川氏の支配以下第三十四章幕末維新の奈良迄に於ては、近世武家時代の地方特に直轄都市に對する地方職制並に近世商工都市としての狀態が記されて居り、又第三十四章明治初年の奈良及び第三十六章縣治時代の奈良に於ては、明治政府の創草以後明治二十年頃迄の地方行政の改變發達を述べて居る。第三十七章奈良朝時代、第三十八章奈良市制時代、第三十九章最近の奈良市勢は明治二十二年、町制實施以後の自治體としての發達より現在の近代都市奈良の姿を詳細に記述して居る。斯くて此の五百餘

頁の奈良市史に悠久千餘年の奈良の歴史を記述し、一讀以てよく奈良を理解せしめ、以て其の意圖せる簡要統制ある歴史たらしめて居る。尙本書は口繪として奈良地方地圖一葉及び六葉の寫眞版及び四十七個所に互り搜圖を入れて居る事は記事の理解を助けるに役立つ所が多い。(奈良市役所發行、菊判五六〇頁、口繪七、圖版四七)(田中)

國民精神文化文獻一三

立入宗繼文書、川端道喜文書

國民精神文化研究所

戰國末期の皇室の式微を説き、織田信長の禁裡の修復を語るものも、この修復に先立つて或は又この修復に當つて、御倉預立入宗繼及び餅商人川端道喜の絶えざる努力のあつた事を知るものは少ない。今回國民精神文化研究所の手によつて公にされた本書は、この間の事情を明かにしようとするものである。

本書は、上述二人の後裔たる立入宗光氏及び川端道喜氏の許に所藏されてある古文書・記錄と、その精密な解説とを収めてある。

收録されてある史料は約百點に達するが、その中には、皇室關係の御事蹟のみならず、又近世初頭の京都市制の解明に資するものが少なくない。更らに西田直二郎・柴田實の兩氏の筆になる解説は廣く當時の日記・古文書に徴した精密なものであるが又それと共に近世初頭の時代の姿を巧みに描き出してある。

これ等の點で、本書は又廣く近世初頭に關心を有するものも一讀すべき書物である。(國民精神文化研究所發行、四六倍版、三三二頁、圖版二十九葉)(田井)

概觀東洋通史

文學博士 有 高 巖 著

東洋史のみに限らず、凡そ歴史の専門的學術的研究の成果をあぐることは無論甚だ難かしいことであるが、其の總論・概論・通史を著すことも決して容易の業でない。特に東洋通史に於て其の難きを覺える。通史としては全卷を一貫する歴史觀があつて、之に基いて取捨斟酌の筆を操らなければならぬ、必らずしも史實の極めて詳細なる羅列を爲すのみが能事でない。また東洋史の研究家は日本・支那のみならず西洋にも多く、此等の人々の發表せる研究に細大漏らさず博通すること既に多大の努力を要する上に、此等の研究は概ね特殊問題で、東洋史研究は部分的・方面的には極めて進んで居るが、或る部分、或る方面には全く未開拓のものあり、通史を著述するに當りその未開拓方面・未研究の部分を如何に取り扱ふべきか、また既に研究中のものも未決定・論議中のもの夥多と之を眞に選擇せんには著者自ら相當の研究を積み以てその何れの妥當なるかを決定せなければならず、東洋通史の著述の容易ならざる所以である。有高博士の本書は著者の謂はる、如く、本來高等専門學校の教科書または一般の參考書として著作したものであらうが、時間的には史

前期より現代に及び、章を分つこと三十、別に著者の識見を發露したる東洋史通觀一篇を附してある。全三十章の敘述にはあらゆる方面を包羅し、殊に支那史の延長と爲るの弊を避くるに努めて、支那と四圍の諸地方とのそれ／＼の特色と價值とを認めて執筆し、あらゆる斯學の研究を參考したれば考據は明示せざれども、一行の記述の裏面にも此の記述を爲さしめたる幾多の論文が藏せられ、行文は一行一句と雖も損益し得ざる苦心の迹が窺はれる。上古・中世・近世などの時代區分を附せぬのも著者の一家の見識と謂ふべきである。通觀にての東西洋文化の比較、東洋文化の特色、支那文化の特色、印度文化の特色、東洋諸國と我が國との國體の相違、東洋諸國と我國との民族性の相違の六ヶ條は著者獨特の識見を發揮したるものにして、本書の龍睛と謂ふべきもの、刻下斯くの如き良き東洋通史の公にされたるのは豈に當に高等専門學校の生徒の幸福のみならんや。敢て江湖に一讀を勧める。(菊版六四四頁、東京市四谷區仲町三同文書院發行、價四・八〇圓)

朝鮮古史の研究

文學博士 今 西 龍 遺著

史學界の一分野に朝鮮史學を確立せられた今西博士が深造博通の學才を懷かれて九原に歸幽せられてより既に五ヶ年、その苦心考證一字一句を苟もせざる遺稿が続々と公刊せられるのは一面にては思出の種でもあるが、また我が學界に斯學研究の範